山田洋次監督の作品『息子』

『息子』は 15 年前の 1991 年の公開だが、現在の地域問題を考えるうえでも示唆に富む作品である。2005 年から「人口減社会」となり、地域間格差がますます広がり、集落崩壊すら現実になっている。東北岩手の過疎の村と大都会東京を舞台にした作品は、父と息子、そして恋人という「人間関係」だけでなく、足もとの地域から現代日本社会の現実を鋭く問いかける。

三國連太郎が演じる父・昭男は、「戦友会」に出席するために東京に向かう。かつて出稼ぎで働いた臨海部の高層マンションに暮らす長男夫婦のところに泊まる。長男は６畳間に父の部屋を用意したから、一緒に暮らそうと説得するが、昭男は田舎で一人で暮らすと応じない。

昭男は何かと心配な次男の哲夫を訪ねる。やっと鉄工場で真面目に働くようになった、哲夫の狭いアパートのシーンが感動的だ。哲夫は取引先の倉庫で黙々と働く、征子に人目惚れする。哲夫は征子をアパートに呼んで昭男に紹介する。昭男は手話により話しあう二人をじっと見つめ、哲夫の気持ちを察して結婚を快諾する。征子が帰ったあと、嬉しさから眠れない昭男がビール片手に「お富さん」を歌うシーンがなんとも言えない。ベテラン三國はやはりうまい。昭男はファックスを大事に抱えて岩手に戻る。途中で近所の老人が「息子さ、会って来たか」と聞いて、「会って来た」と答えると、老人は「幸せだな、おめえは」という。昭男は「ああ、幸せだ」と頷きながら雪のなかを自宅に向かう。このシーンも忘れがたい。

「映画『息子』を語る」という椎名誠との対談のなかで、山田監督は次のように述べている（岩波・同時代ライブラリー76）。「東京や大阪という大都会に生きる若者たちと、いなかに淋しく暮すその両親との愛情の交流と断絶。そして次第に消えていくふるさとのくらしや風景。そんな漠然とした素材が僕の頭の中にあったのですが、なかなかうまくまとまらなかったんです。そんな時に椎名さんの『倉庫作業員』に出会って、あ、これだ、と思いまして。結晶の核が見つかったとでもいうか。」

（2006 年 8 月 22 日　記）